

# 私の幼児教育論（その二）

——子どもをとりまく生活環境——



佐藤文子

最近は大入のような子どもと幼児のような大人が増えてい  
言われます。私自身、青年後期にいる人々と接触しながら、また  
幼稚園の子どもたちに接しながら、そのことを強く感じます。一  
人一人について、その成長、発達の様相をもう少し詳しく検討し  
てみると、その発達に「ふし」がないかと思われま  
そしてその原因は、発達のある時期に経験しなければならな  
とを省略していることにあるのではないかという思いがしま  
発達心理学に関する本には、人間の発達をいくつかの段階に分  
けて、それぞれの発達段階において果たさなければならぬ発達  
課題を示しているものがあります。私は、このような発達段階説  
から学ぶことが多いのです。

発達心理学の動向を歴史的にみると、初期には子どもの発達の  
姿を編年史的に記述し、年齢別に発達現象をひとまとめに区切  
て、発達段階を設定していくという方法が優勢を占めていま  
最近では有機体の内的成熟と環境刺激の交互作用の中に発達のメ  
カニズムを探ろうとする傾向が強く、このような立場からは、古  
い成熟優位の発達段階説は批判されがちです。

しかし環境の影響と個体の側の学習を重視する最近の発達心理  
学は、どうしてもミクロな研究法をとることになり、人の長期に  
わたる発達を全体として統合的にとらえることが難しくなりま  
す。

ところで、環境刺激によって人の発達は大きく影響されるとい

っても、人の生活しうる環境というものはそう無限に変えうるものではないし、乳児期に望ましい環境と二十歳の時に望ましい環境とは自ずから異なります。従って環境の影響、そして個体の側の学習が重視されるならば、それだけ、望ましい発達のために、どの時期に、どんな経験が必要かが新たに問われなければなりません。

このような課題に答えるような発達段階説が、新しい研究の立場から提示されてもいますが、新しい段階説も、研究者の興味によって、あるものは人格の発達を中心に、あるものは認知面の発達を中心に考えられており、人の全体的発達を統合的にとらえているものはなかなか見あたりません。

それぞれの研究はそれなりに教育に必要な知見を提供してくれますが、教育に従事する場合、人の一生を展望しながら、今の目の前にいる子どもは、あるいは学生は、人生のどの時期にいるのか、そして今、どういう経験を必要としているのか、今している経験はどのような意味をもつのか、ということを見極めなければなりません。こうした問題に対する目安を与えてくれるような発達段階説を生み出せないものだろうか、と私は考えております。

このような発達段階説は、私たちが今日住んでいる現実的、具体的環境とのかかわりにおいて、それぞれの段階の発達課題を示す

ものであり、人の全体的発達を統合的にとらえたものでなければなりません。

従来の発達研究をふり返ると、種としての人の成長・発達に望ましい環境はある範囲内にあり、時代や地域をこえて、ある程度共通していることが示唆されます。一方、民族学者や文化人類学者たちは、地球上に、多様な生活様式、文化型のあること、そしてそれによって民族や地域に特有の基本的性格が形成されることを教えてくれました。しかしこれまた、私たちはどのような生活様式、あるいは文化型でも自由に選択しうるものではなく、人は自分が生まれおちた文化圏の中で育てられることによって、自らの文化圏の生活様式を身につけていくことを、これらの研究者たちは示しております。

このように私たちは、種としての人にある程度共通に必要な環境をふまえながら、民族的、文化的に規定された環境の中で生活しています。そして社会・文化が次の世代に対してどのような期待をもつのか、子どもの発達のそれぞれの時期に、社会・文化がその期待を提示するところに、発達課題が生ずるのであり、子どもがそれに適切に対応することができた時、それが「ふし」となり、発達の軌跡となるのだと考えます。

ここで、最近の子どもの発達に「ふし」がないのではないかと

いう最初に投げかけた疑問にもう一度戻ると、今日の大人が、次の世代に何を期待するのか、それぞれの時期に、子どもに対して明確に示していないことが、子どもの発達に「ふし」をなくしている一つの原因ではないかと思えます。幼児教育に従事する時、何を次の世代に伝えなくてはならないのが、私たち自身に明確になっていなければなりません。しかし幼児期にあつては、あれ、これを知識として教えるのではなく、大人と子どもが共に生活する、その中で子どもは生き方として、文化を継承していくのです。従つて私たちが今生活している環境が子どもの発達にとつてどうなのか、今の社会的、文化的環境の中で、どの時期に、どのような刺激やはたらきかけが必要なのかを見定めることが大切です。

○

これまでではかなり抽象的に述べてきましたので、もう少し具体的に現代の子どものとりまく生活環境について考えてみたいと思えます。

一般に幼児期と呼ばれている時期は家庭でのしつけの時期でもあります。子どもはこの時期に、母親、父親を通して、自分が住んでいる社会の生活のし方を身につけ、社会的規則や秩序を学ん

でいきます。また、歩行や言語がかなり自由になる時期で、子どもは自分から積極的に周囲を探索し、自分の世界を広げていきます。しかしこの時期には子どもは、直接経験により、感覚運動的に世界と接触します。

さて、このような時期にある子どもをとりまく現代の日本の環境は、どのようなものでしょうか。日本は昭和三十年初めの経済高度成長時代を境に、経済面ばかりでなく、文化面でも大きく変化しました。そして最近ではそのひずみがさまざまな面に現われ出しており、教育についても、いろいろの問題点が指摘されております。

私はここで今日の教育について総括的に論評するつもりはありませんし、また現代の生活環境の子どもの発達に及ぼす影響を体系的に論述する気もありません。ただ先に述べた、発達に「ふし」がみられないこと、大人のような子どもと子どものような大人が増えていること、などをめぐって、私たちをとりまく生活環境について、日頃考えていることを、二、三述べてみたいと思えます。

経済高度成長は家庭生活にさまざまな変化をひき起こしましたが、その一つに家事の機械化、電化があります。電気炊飯器、電気洗濯機、電気掃除機、冷蔵庫……今日どこの家庭にも電気製品が一杯です。このような子どもの身近な生活環境の変化は、子ど

もの生活経験にどんな変化をもたらしただしでしょうか。

先ず御飯をたくことについて考えてみましょう。一定量の米をといで、電気炊飯器に入れ指示された通りの水を入れて、スイッチを押す。これは幼稚園児でも年長児ならできます。そして一定の時間が経てば御飯はでき上がっています。結果はお母さんがしても五歳の子どもがしても同じです。ところが釜で自分で水加減火加減をしてたくなると、今の大学生の何人が上手にできるでしょうか。御飯をたくということは、以前はかなり技術を要すること、御飯が上手にたけるということは、成人した一人前の女性の条件の一つでもありました。でも今日では、電気釜、ガス釜を用いれば、五歳児でも、お母さんでも、おばあさんでも、同じようにたけますし、電気とかガスが停まったとなると、お母さんでもおばあさんでもお手上げです。

洗濯についても同じことが言えます。洗濯物を洗濯機に入れて、ボタンを押せば、何分か後には洗いがり、脱水までされています。これも五歳児がボタンを押しても、お母さんが押しても同じようにでき上がります。以前は、お母さんがたらいにお風呂のお湯をくんで、石けんをとかし、ごしごし洗っていました。そばで子どもが見ている、時には手を出して自分もごしごしやったりしますが、大きいものなど、なかなか扱えませんし、たらいの

水のとりかえなども子どもの手にはおえません。そばで見ている子どもは、「お母さんて力持ちなんだな」と思います。

お風呂たきも、最近ではガス風呂が多くなり、自動点火ですぐ火がつきます。これも以前は薪や石炭などが用いられていて、かなりの技術がいるものでした。子どもはお手伝いでたこうとしても、煙が出るばかりでさっぱりもえない、そこへお父さんが来て、薪と薪の間に一寸すき間をつくただけで、勢よくもえ出す。子どもはお父さんのすることを熱心に見守りながら、「お父さんてえらいんだな」と思います。

このような日常生活の変化は、幼児期の子どもの発達という点からどう考えたらよいのでしょうか。

第一には、機械化、電化されたことよって、ボタンあるいはスイッチ一つ押せば、何分か後にはでき上がっているということ、その間の過程がどうなっているのかわからないままに家事が進められることが多くなりました。機械化される以前には、家事一つ一つの過程にずっとつきそって行ったので、その直接経験から、いろいろと学ぶこともできたわけです。機械化されますと、スイッチ一つで機械を動かすことはできても、機械の構造や機能について知ることは難しく、それに関して学ぶのはずっと後になって学校でということになります。また途中の状態を見たいと思

っても、始動中の洗濯機や炊飯器に手をかけることは危険なこと  
で、「あぶないからダメ」となります。

幼児期は、先にも記しましたように、直接経験により、感覚連  
動的に世界を知っていく時期です。この時期に日常生活において  
直接経験による事物との接触が少ないということは、単に御飯が  
上手にたげる、たけないという問題をこえて、子どもの発達に重  
大な影響を与えてはいないでしょうか。

第二に、以前は、家事それぞれの技術をマスターするのになら  
りの年月を要しました。子どもは母親、父親のそばで、彼らのす  
るのを見、模倣して、技術を習得しました。しかし機械化され  
た今日では、ボタン一つ押せば自分の思う結果が出てきます。こ  
れは、今日の子どもが好む変身物語に通じはしないでしょうか。  
スイッチ一つで変身して悪ものを退治するということは大人にと  
ってもなかなか魅力ある筋書きです。私も、冬の朝など、ふとん  
の中でスイッチ一つ押して、しばらくして起きると、部屋がきれい  
に掃除され、食卓の用意ができていれば……などと思うことが  
あります。ですと、現実にはスイッチ一つで家庭の中が全て変身  
するとすれば、子どもは自分で苦勞し、努力して、何かを仕上げ  
ていく必要もないでしょうし、その結果は、そういう努力のでき  
ない人になってしまうのではないのでしょうか。

第三には、今まで述べてきたこととも関連して、家事の機械化  
は家庭での人間関係をも変質させはしなかったでしょうか。長年  
にわたって人生の先輩である父親、母親から家事の技術を学んで  
いく、その過程で、技術をマスターしているものとして長上に対  
する尊敬が自ずから生まれ、人間関係に秩序ができ、そのような  
秩序の中で文化の伝達がスムーズになされていったのですが、五  
歳児がしても、母親がしても、結果は同じということになると、  
家庭における人間関係の秩序は生まれにくいのではないでしょ  
うか。長上に対する礼儀を、外側から強いられてもなかなか身に  
くものではないでしょう。

更にまた、長期にわたる技術習得の過程に、発達の「ふし」も  
できたのでしょうか。

○

以上、現代の家庭生活に対する批判めいたことを述べてしま  
したが、私は決して、洗濯機や電気炊飯器無用を主張するものでは  
ありませんし、昔の生活を礼讃する気もありません。女性の立場  
からは、家事の機械化、電化によって家事は省力化され、いろい  
ろと思恵を受けるところも多く、煙をもうもう立てて家をすす

一杯にして、薪で御飯や風呂をたく昔の生活に戻りたいとは、私は思いません。

ただ、幼児期の子どもの環境という点からみると、今の生活環境はこれでよいのかと考えてしまいます。私は、幼児期には、第一次集団としての家族の中で、基本的生活習慣を身につけ、自分の役割をしっかりと学びとることが大切だと思います。そのためには、安定した人間関係の中で、直接経験による段階的な学習が必要ですし、経験から学ぶのにはそれなりの時間を要します。昔の生活様式は子どもが少しずつ技術を習得するようになっておりましたし、その過程で子どもは、自分が行為の主体であり、生活の主人であるという感覚を得ることができたのですが、今日のように、ボタン一つ押せば全てOKという生活では、一步一步マスターしていくことによって得られる自分自身に対する確実さの感覚——自信は得にくいようです。

夏は冷房、冬は暖房と、自然の秩序に逆らって快適さを求めて

いる現代の生活において、子どもに生命の秩序をどのように回復させるか、大人の知恵が求められるところですよ。

今回は、子どもをとりまく生活環境の変化を、家事の機械化に焦点をあてて考えてみました。しかしふり返ってみると、何年か前には、職業の家庭からの分離が生じ、それに伴って今述べたのと同じような変化が家庭に起こっていたのです。今日、子どもが家庭で働く父親の姿を見ることは殆どなくなりましたし、家庭において父から子へと職業技能が受けつがれることも極めて少なくなりました。この職場と家庭の分離という都市化現象が、家庭における父親不在をもたらしたとも言われますが、家事の機械化が家庭における母親不在を招来しはしないか、洗濯機や掃除機の音を耳にしながら、ふっとそんな不安が心をよぎります。

(秋田大学)

